





深い海の中で見つけたのは、  
底知れない探求心だった。

研究者たちの、そして人類の、  
「もっと知りたい」という  
あくなき情熱にこたえるために  
日本海洋事業は生まれました。

海底は一体どんな形をしていて  
どんな生き物が住んでいるんだろう？

まだ知らないことを、知りたい。  
その一心で船を出し、荒波の中調査を続け、  
ひとつずつ未知を拓いていきました。

誰も見たことがない世界へ  
探求の旅のはじまりです。

あくまで  
おもてなし

研究者たちの、そして人類の、  
「もっと知りたい」という  
あくなき情熱にこたえるために  
日本海洋事業は生まれました。

海底は一体どんな形をしていて  
どんな生き物が住んでいるんだろう？

まだ知らないことを、知りたい。  
その一心で船を出し、荒波の中調査を続け、  
ひとつずつ未知を拓いていきました。

誰も見たことがない世界へ  
探求の旅のはじまりです。

“無人”の深海へ、  
人の力で挑む。

深海 6,500 メートルへ向かうために  
かかる時間は 片道およそ 2 時間 30 分。  
限られた時間で、命がけの挑戦です。

無事に人びとが深海へたどり着くには、  
丈夫な探査船をつくるだけではなく  
船を動かす高い技術と、  
自然を相手にする知識が必要でした。

安全を守って船を運航するひと  
探査機を自由自在に操るひと  
船上で研究を手助けするひと  
それぞれが手を取り合うことで  
ようやく、未知なる世界へと  
たどり着くことができたのです。





私たちから、地球へ。

海は、大気や大地、  
自然現象と深く関わり合いながら  
地球のあらゆる場所とつながっています。

近年、海洋プラスチックの問題や、海水温の上昇など、  
地球の「助けて！」という声が  
世界各地の海を通して聞こえてきます。

「地球のために 何ができるだろう？」  
私たちは考えました。

海底調査から、地震のメカニズムの解明を手助けしたり。  
開発の技術を活かして、脱炭素へ貢献したり。  
まだまだ、できることがたくさんあります。

探求することで 生まれた知識や技術を  
未来の地球のために使っていきたい。

それは、私たちの使命だと気づいたのです。

地球と向き合う中で  
知れば知るほどに広がる知らない世界は、  
いつでも私たちを夢中にさせてくれました。

先人たちが築き上げてきた英知は  
また私たちを知らない世界へと向かわせてくれます。

未知を切り拓いていくことは、  
人びとの長年の願いであり、未来への希望でもあるのです。

だから私たちは、挑み続けます。

尽きることのない人類の、そして私たち自身の  
「知りたい」という強い想いを、  
地球の未来へとつないでいくために。

# 未知へ、まっすぐ



# 探求領域

Our Business Field



わたしたちのフィールドは、  
地球です。

未知へと挑む人たちの想いに応え、最前線でリードすることで、  
人も事業も、成長し続けてきました。  
やがて私たちのフィールドは海を越え、地球へ——。  
近い将来、宇宙さえも「探求領域」となりうるかもしれません。

# 運航事業

Vessel Operation Business

まだ見ぬ海を進む、  
船と人を支える。



海洋への深い知識と、高い運航技術を活かし、調査船や実習船などの運航・管理を行っています。船員による安全運航、陸上スタッフによる航海支援、保守・整備に関する技術的なサポートなど、運航に関わる多種多様な分野を担っている事業です。



## 調査船の運航

主な仕事は、国立研究開発法人海洋研究開発機構（以下 JAMSTEC）が所有する調査船のオペレーションです。「調査船」という特性から、特殊な技術が必要とされるため、乗組員のスキルも多種多様。船を安全に操縦し、観測や調査を達成するための航海計画の立案、船上で起こるトラブルへの対応、乗船者の栄養管理。さらに、調査で必要とされる特殊機器を、船上でオペレーションや整備するなど、技術面もサポートしています。



## 陸上からのサポート

船の運航のためには、陸上で細やかなサポートや、専門的な手続きが欠かせません。停泊する港湾の確認や、航海の安全性の検討、燃料や資材・食糧の準備まで。当社は、陸上スタッフも専門の知識を活かして、あらゆる方面から運航を支えています。



## TANKYU-COLUMN

### 船の安全を支える“工務監督”とは？

工務監督とは、船体や機関、船舶の保守管理を行う役割のことです。当社では、それぞれ専門の工務監督により「ドック」と呼ばれる毎年の検査や、修繕などの各工事に立会い、施工方法・仕上がりのチェックや、工程管理を行うことで、高品質な工事になるよう力を尽くしています。また、トラブルが発生した場合には、造船所やメーカーとも連携を取りながら、迅速な修理対応を行います。



# 調査事業

Scientific Research Business

地球上の変化を、  
あらゆるデータから観測する。



船上での調査によって取得したデータの解析や、観測機器の運用・開発を行っています。資源探査、地震や気象など自然現象の観測、海底の地形調査など、様々な分野で専門性の高いサービスを展開しています。



## 大気・海洋観測

船舶や潜水船に搭載された観測機器による、データの取得・解析を行っています。海底の地形調査から海上気象の観測まで、地球環境変動の最前線の調査に携わっています。また、深海調査の航海ではコーディネーターとしても活躍しています。



## 地震探査

海底地震計 (Ocean Bottom Seismograph:OBS) を用いた自然地震の観測、エアガン・ストリーマーケーブル・OBS を用いた音の反射や屈折を利用した海底下のプレート構造の調査など、様々な探査を通して、地震のメカニズムの解明に貢献しています。

## TANKYU-COLUMN

### 南極地域観測隊 (JARE) への参加

氷に覆われた地球で最も寒い場所、南極。当社は、JARE の夏隊に参加し、南極観測船「しらせ」の船体固定観測装置の運用支援を行っています。また昭和基地周辺の観測サイトでは、様々な観測装置の設置・回収・整備を担当しています。海洋調査船で培った技術を活かしてデータを取得し、地球の歴史や気候変動の仕組みの解明に貢献しています。



## TANKYU-COLUMN

### 宇宙を拓く『D-Egg(ディーエッグ)』 の開発&製造

千葉大学が取り組む、『IceCube アップグレード計画 (※)』で採用された『D-Egg 新型光検出器』の開発・製造に協力しました。水深 7000m でも耐えられる耐圧ガラスの開発や、内部機器の配置・固定方法の検討を行い、計 300 台を製造。完成了 D-Egg は南極点の氷河の下に埋設され、宇宙研究に役立てられます。



※宇宙より飛来するニュートリノの観測を目的とする研究計画のこと。



# 水中機器事業

Underwater Equipment Business

オペレーション&  
エンジニアリングで  
水中を自在に。



深海調査における水中探査機の運用・管理を軸に、洋上風力の発電設備や海底ケーブルに関する水中工事などで活躍する、水中ロボットの運用支援を行っています。これまでに培った運用経験と技術を活かし、各種水中機器のメンテナンスと機器の改良、そして新規開発にも取り組んでいます。



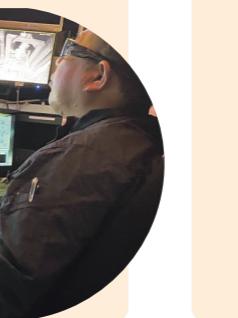
深海調査機器の運用・管理・  
エンジニアリング

JAMSTEC の所有する有人潜水調査船および無人探査機の運用・管理を行っています。オペレータ兼エンジニアとして、潜水船や探査機の操縦から整備計画の立案、機器メンテナンス、必要となる部材や消耗品の調達を一元的に管理しています。

## TANKYU-COLUMN

ROV（遠隔操作型無人探査機）  
のオペレーション支援

深海調査で培った ROV (Remotely Operated Vehicle) の操縦技術により、お客様が所有する各種 ROV のオペレーション支援を行っています。大型の Work Class ROV から小型の Observation Class ROV (水中ドローン含む) まで、大小様々な ROV システムを用いて、海底ケーブルの埋設工事・水中構造物の点検作業・環境調査など、多種多様なオペレーションを水中作業技術から支えています。



## TANKYU-COLUMN

水中機器の開発・  
運用のご提案

水中という特殊な環境に適応した機器として、お客様のニーズに合わせた機器の設計・開発を行っています（例：低照度下で撮影が可能な水中カメラや LED 投光器、水中録音機など）。また水中ドローンを含む小型 ROV などの、水中ロボットの運用や導入をご検討されている方々に、効率的で高精度なデータ取得に向けたカスタマイズやオペレーション方法のご提案も行っています。





# ともに探求する パートナーの声

## Our Partners' Voice

これまで地球の未知へと挑んできた旅路で、  
私たちは数多くの「探求者」に出会ってきました。  
知らないことを知りたい。まっすぐに探求を続ける  
5名のパートナーの皆さんのお想いをお聞きしました。

※2022年1月取材

神戸大学 海洋底探査センター  
センター長

杉岡 裕子 氏

「地球史」を  
解き明かす挑戦。  
それは、船に乗ること  
からはじまる。

私は地震学を通して「地球の構造」を知りたいと考えています。調査方法としては、海底に地震計を置いておよそ1年の間、地震波を観測します。そのデータを分析することで、病院のCTスキャンで体の内部がわかるように、地球の内部がどうなっているのか調べることができます。まさに地球の構造から「地球史」を解き明かす壮大な調査は、船がなければはじまりません。日本海洋事業さんに運航や調査のサポートをしてもらったおかげで今の研究があります。現在は「神戸大学海洋底探査センター」で、学生と共に調査や研究をしており、実習船でもお世話になっています。地球科学において重要な海洋の現場から、教科書には書いていない学びを、皆さんと一緒に伝えていこうと思います。



Partner

02

海洋研究開発機構 海域地震火山部門  
部門長

小平 秀一 氏

地球の「突発的な変動」を理解し、  
正しく恐れられる未来へ。

JAMSTEC で研究を続け、25 年以上が経ちます。中でも東日本大震災から 1 年後、日本海洋事業の皆さんと向かった現地調査のことは特に印象に残っています。船内で水中カメラを通して、酷く荒れた海底を見て、思わず驚きの声が漏れました。「千年に一度」とまで言われる未曾有の出来事を経験した研究者として、正しい記録を残す責任を感じた航海でした。私自身、何のために研究をしているのか。それは、地球で起こる「突発的な変動」を正しく理解するためです。目に見えない変動も記録して可視化することで、将来の予測にもつながるかもしれません。今起きていることを正しく知り、起きるかもしれない現象を正しく恐れる。そのためのお役に立ちたいと思いながら、今も研究を続けています。



Partner

03

東京大学 名誉教授 株式会社ディープ・リッジ・テク  
代表取締役

浦 環 氏

ロボットの成長から、  
新しい海洋の世界をつくる。

自律型海中ロボット。私は長年その開発に夢中です。自分で開発したロボットを用いた研究・調査のため、これまで何度も航海を重ねてきました。航海において私はロボットの操縦も行いますが、水中に入れられるかどうかを判断するのは、日本海洋事業の「船長」の役目です。船長は、私のロボット開発の信条や、調査の目的を理解してくれているからこそ、どんな厳しい状況でもどうにか実現するための策を考え続けてくれました。安全を守って「やりましょう」と言ってくれた一言に、どれだけ救われたかわかりません。まずは小さな実績から技術を積み重ねて、ロボットを育てていくことで、新しい海洋の世界が見えてくると思っています。



Partner

04

国立極地研究所 南極観測センター  
センター長

野木 義史 氏

「知りたい」という気持ちが  
南極大陸へと駆り立てる。

「南極の氷の下はどうなっているんだろう?」という純粋な好奇心。それが私の原動力です。現在は南極域で重力や磁気を調査することで、大陸の形成や分裂について調べています。日本海洋事業さんは洋上のことはもちろん、観測機器も詳しいため、南極での観測全般で関わっていただいている。機器のトラブルがあったときにも、限られた条件でできることをご提案いただけるのは非常にありがたいことでした。おかげで貴重な観測データを集められています。観測を重ね、信頼できるデータが集まれば、今までの常識が覆るような発見があるかもしれない。そんな「何かを知りたい」気持ちから想像を広げ、楽しむ気持ちを大切に、日々南極と向き合っています。



Partner

05

千葉大学 ハドロン宇宙国際研究センター  
教授

石原 安野 氏

「宇宙の営みを観測したい」  
根底に情熱があるから、  
わかり合える。

私は、宇宙からくるニュートリノを観測して、宇宙で何が起きているのかを調べる研究をしています。すでに観測されたものより、さらに高エネルギーのニュートリノがあるらしい。それをどうにか観測しようというテーマから、南極点での実験がはじまりました。2012 年、探し求めていたニュートリノを発見したときは、宇宙の営みに近づけた喜びで胸がいっぱいでした。さらに「次世代の検出器を開発したい!」と考えていたときに出会ったのが、日本海洋事業さんでした。氷を掘って、その穴に沈める検出器に、もっと効率的な形はないだろうか。そんな構想を実現するため、共に考える時間はワクワクするものでした。宇宙と深海という異なる分野でも、根底では、宇宙や地球の営みを観測したいという情熱で繋がっていたのだと思います。





# ロゴについて

About Our Logo



「未知なる世界」と「対峙する」  
日本海洋事業そのものです。

日本海洋事業の主なフィールドである  
大気・海洋・深海をベースに  
「探求心あふれる未来」を表すため  
神秘とロマンにあふれる水平線をモチーフにしています。

右下の小さな円は、  
未知なる世界と対峙する  
日本海洋事業そのものです。  
対角線上にある左上の、まるい空白。  
そこに右下の円を重ねてみると、ひと回り小さく、  
その空白にぴったりと重なることはありません。

決して埋まることのない  
「未知」への探求心  
それが、私たちの原動力です。

VISION 実現したい未来

未知なる世界を拓いた感動を共有し、  
子どもたちの探求心があふれる未来をつくる

MISSION 私たちの使命

地球を愛する人たちの、  
未知への探求を「最前線」でリードする

VALUE 約束する価値

現場力

いかなるフィールドにおいても柔軟に、  
繊細かつ丁寧に対応する

共感力

目的とその背景を理解し、  
共に考え、達成に向け最善を尽くす

向上力

技術・ノウハウを継承し、  
常に進化・昇華させ続ける

探求心と感動を受け継ぎ、  
海から地球の未来をひらく。

日本海洋事業は、1980年、日本の海洋調査を最前線で支援するという使命を持って誕生しました。以来40数年間、今も昔も社員たちを突き動かすのは未知なる世界への探求心です。特に、光も電波も届かない深海に対峙し、知恵とテクノロジー、そしてもてる能力のすべてを駆使して開拓を進めてきた歴史は、私たちの誇りであるとともに当社の技術的中核も成しています。

題の数々が、実は海とつながって発生しており、解明の鍵もまた海の中にあることが、徐々にわかってきたのです。これらの課題解決のため、海に乗り出す人々がいるならば、探求を究めてきた存在として私たちを頼ってほしい。この新しく壮大な使命のもと、今や当社の探求領域は、海とつながる大気や河川、宇宙にまで広がりを見せています。

いつの時代も探求心の芽は、子どもたちが身近な自然との触れ合いを通じて「これってすごいな」「不思議だな」と目を輝かせる原体験の中にはあります。そんな探求心を育むフィールドとしての地球を、未来永劫残せるように。私たちは、未知を切り拓いた感動を広く分かち合いながら、理屈を超えて「心搖さぶられる」体験を連鎖させ、子どもたちの探求心あふれる未来をつくる土壌へと、変えていきたいと願っています。

日本海洋事業株式会社 代表取締役社長

山田 正克



# 海洋教育

Education

地球上の生命はおよそ7億年も前、  
海からはじまったと言われています。

まだまだ謎に包まれている海を知ることは、  
地球の未来を拓く鍵なのかもしれません。

子どもたちをはじめとする、  
地球を愛する人たちの探求心を  
未来へとつなげていくために。  
私たちも共に学びながら、挑戦していきます。



## 大島丸

OSHIMA MARU

「大島丸」は東京都立大島海洋国際高等学校が所有する実習船です。 「海に学び、未来を拓く。」という同校コンセプトのもと、各学年の生徒が操船実習や海洋観測などの航海実習を行います。全国でも初となる、民間企業としての実習船運航。長年にわたる調査船の運航実績と、実習船で乗組員を経験した船員の知見を融合し、教育理念に基づいた実習を全力で支援しています。

「ひとりでも多くの生徒が、笑顔で下船できるように」という目標のもと、これからも安全で楽しい航海に向けて取り組んでいきます。

## KOBEC 業務

Kobe Ocean-bottom Exploration Center

私たちは国立大学法人神戸大学が実施している研究航海と実習授業において、クロスアポイントメント制度を活用し、担当教員として教育・研究活動に携わっています。学生の皆さんとともに船に乗り込み、様々な手法で調査、観測を行い、データの取得から解析、そして結果の考察に至るまで、一通りの研究活動を体験してもらっています。これら研究・実習航海に参加する学生の皆さんは船に乗ることすら初めてという方が大半ですが、“地球を観測する”というダイナミックな体験を通じて固体地球科学の世界に少しでも興味・関心を抱くきっかけになればと思い、海洋調査の最前線で培ってきた知識と経験をフルに活用して全力で取り組んでいます。





## 洋上安全訓練

Safety Training for Offshore Worker and Seafarer



2024年4月より日本郵船株式会社とともに秋田県男鹿市に開所した、洋上風力発電の訓練センター「風と海の学校 あきた」にて、海事産業に従事する作業者に向けた訓練サービスを提供しています。洋上風力発電作業員向け GWO 基礎安全訓練<sup>\*</sup>における海上生存訓練（Sea Survival）や、消火訓練を含む船員向けの STCW 基本訓練など、海洋現場の最前線を知る当社のインストラクターが訓練指導を行っています。また、本訓練センターは産官学の連携により、既存の「学校」の一部を活用しています。受講者だけでなく生徒や地域の方々にも、海事産業の一端を幅広く伝えることで、日本の未来を支える海洋人材の育成に注力しています。

\*GWO 基礎安全訓練 : Global Wind Organisation が制定した認証訓練

## 水中ドローン操縦体験

Underwater Drone Piloting Experience

近年、「水中ドローン」はその入手性と汎用性から、海洋・湖・河川・ダムなどをフィールドにする、あらゆる業界への導入が期待されています。当社はその水中ドローンを通じて、水中を調査する仕事の難しさと楽しさを体感してもらう操縦体験の機会を提供しています。プールや岸壁で実際に水中ドローンを操縦すると、思った通りに動かせる喜びや、水中にいる生物の発見など、未だ見ぬ世界が拓かれる感動があります。未知に挑む「海洋調査」や「海洋工事」などの海の仕事の魅力を伝えながら、未来をつくる子どもたちの「探求心」を育む活動に取り組んでいます。



## Voice

— 海洋が育む、探求の芽 —

昔も、今も、  
これからも。  
「まだ知らない世界」を  
知りたい。

板倉 耕太郎さん

中学1年生・北海道在住

※2022年取材当時

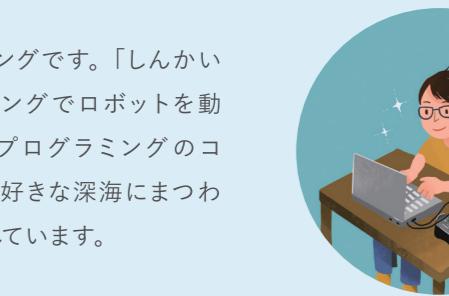
「宇宙飛行士になりたい」。

5歳のころの僕の夢です。両親からもらった本を読んで、心惹かれた宇宙。まだ誰も知らない世界がこんなにあるんだと驚きました。

「知らない世界を知りたい」という想いで、深海にも興味を持ちはじめたのは、小学生のころ。小学校に入学したばかりのときに「しんかい 6500」を見学させてもらったことは、今でも覚えています。想像していた何倍も大きい、迫力あふれる機体。今まで本で見ていた世界よりも、自分で体験した世界は、感動の深さがちがいました。「しんかい 6500」の操縦士の方に聞いた、「深海へ行きたい」という目標と、そこへたどり着くための努力。そこで聞いたお話は「目標を持って努力すれば、誰も見たことがない世界を見ることができるんだ」というあのころの感動と共に、今でも胸に刻んでいます。

実は今、一番興味を持っているのはプログラミングです。「しんかい 6500」を見たときのあの感動と、プログラミングでロボットを動かすワクワク感はちょっと似ているんです。プログラミングのコンテストにも出場してロボットを動かしたり、大好きな深海にまつわるゲームを自分でプログラミングしてつくったりしています。

5歳のころの自分が、本を読んで宇宙や深海に興味を持ったように、10年後も、20年後も、自分の目でいろんなことを確かめて、世界を知る。そんな大人になっていてほしいです。知らないことを知りたいという気持ち。それが、今も昔も、僕の原動力になっています。



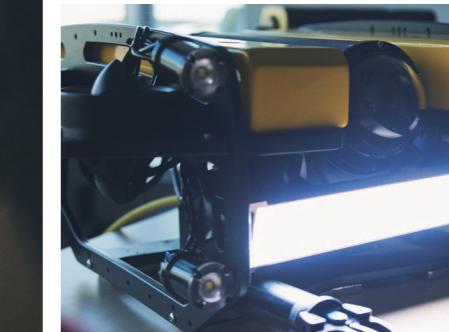
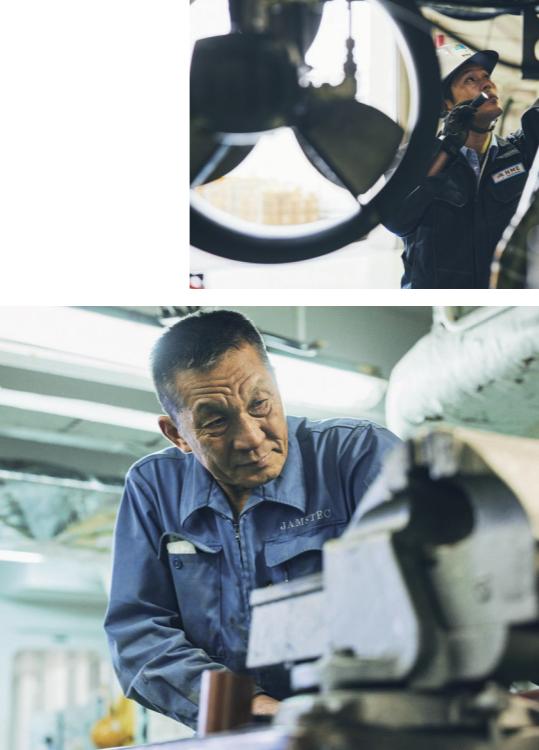
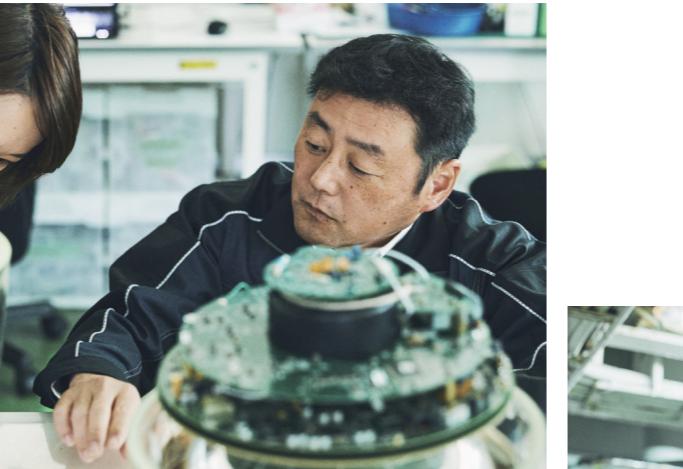
# 会社概要

## Profile

商号	日本海洋事業株式会社
創立	1980年1月
代表	代表取締役社長 山田 正克
資本金	50百万円
従業員数	367名（2024年6月1日現在）
所在地	<b>本社（神奈川県横須賀市）</b> 〒238-0004 神奈川県横須賀市小川町14-1 ニッセイ横須賀センタービル8F
	<b>福浦事業所（神奈川県横浜市）</b> 〒236-0004 神奈川県横浜市金沢区福浦1-7-39
	<b>男鹿事務所（秋田県男鹿市）</b> 〒010-0511 秋田県男鹿市船川港船川字外ヶ沢124-1
株主	<ul style="list-style-type: none"><li>株式会社ニッセイ</li><li>株式会社グローバルオーシャンディベロップメント</li></ul>
事業内容	<ul style="list-style-type: none"><li>海洋調査船、実習船等の運航・管理</li><li>有人潜水調査船、無人探査機の運用</li><li>各種海洋調査研究支援業務及び気象観測支援業務</li><li>洋上安全訓練サービスの提供</li></ul>



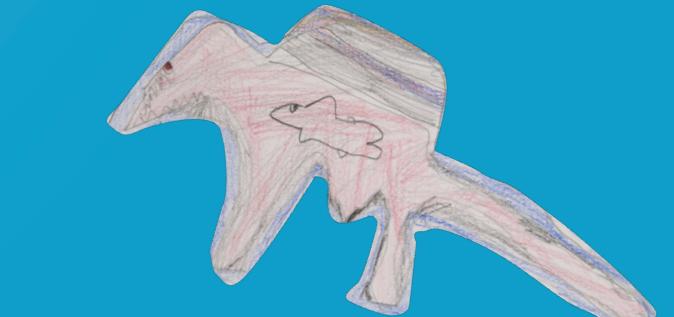
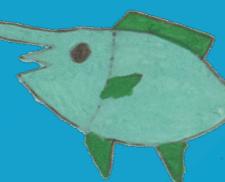
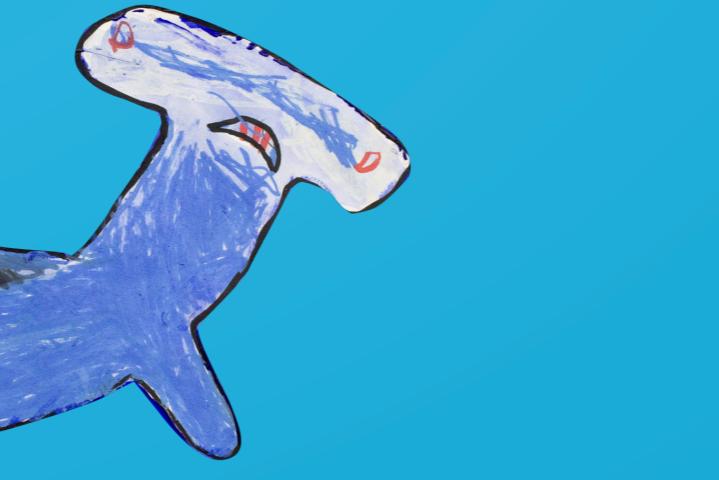
ミックス  
紙 | 責任ある森林  
管理を支えています  
FSC® C006414

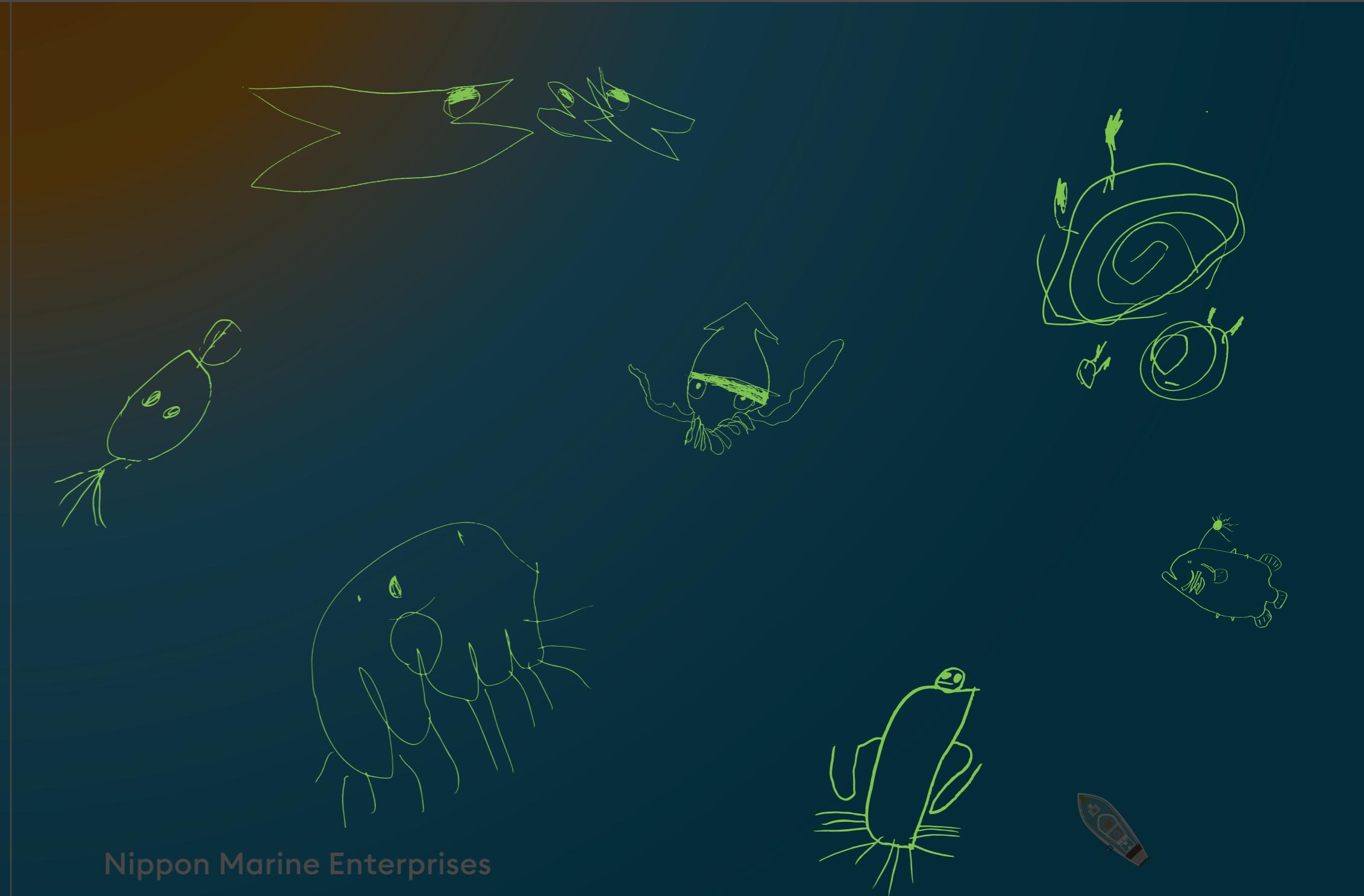




未知なる世界の最前線へ  
尽きることのない探求心で  
どこまでも、挑み続けます。

日本海洋事業





Nippon Marine Enterprises